

本日の概要

1 「言語指導場面の実際」

- ①アセスメント
- ②活動の実際

2 「教材教具と演習」

- ①教材教具紹介
- ②口の体操（*演習）

「コミュニケーション指導（チームC）」

週1回，一人25分間

児童1人対教師1人（小学部）

*発音・発語・コミュニケーションの指導

3 「子供たちの今」

*その後の変容

4 「本日のまとめ」

* 配付資料では，個人情報保護の観点から，児童生徒の写真等は割愛しています。

本校（小学部）の自立活動について

- 児童一人に対して、週に25分間の自立活動の時間を設ける。
（児童の実態に応じて、4つのグループに分け、通年同じチーム、同じ教師と実施する。）

チーム A (Autism) : やりとり (物, 人, 社会的状況学習)

チーム B (Body) : ぎこちない身体の動き

チーム M (Movement) : 人間関係, 身体認知, 空間認知

チーム C (Communication)

*** ことばを促し、ことばを使ってのコミュニケーションの楽しさを実感する。**

ダウン症児の構音に関する様子

口腔機能

話し方

もっている力

芽生えてきた力

ことばに
つなげる

他者とのコミュニケーションの楽しさを実感！
【「ことば」でのやりとりって楽しいね♪】

言語指導場面の実際

(R - P D C A サイクルから)

- 1 アセスメント (Research)
- 2 ターゲット音の決定 (Plan)
- 3 活動 (Do)
- 4 評価・振り返り (Check)
- 5 次の活動へ (Act)

チームC 自立活動の実践

1 アセスメント (Research)

- ・ 口腔機能チェックリストの活用
- ・ 絵カードを用いた構音検査
- ・ セラピスト（言語聴覚士：S T）からのアドバイス
- ・ 部内での検討

2 「ターゲット音」の決定へ (Plan)

* 一人一人の実態に応じて、「ターゲット音」を決定する。

まとめ

- * 「医療従事者が行う言語訓練 ≠ 教師が学校で行う自立活動」であるという前提が基本。
- * 「構音指導」のベースに，児童生徒の将来の「コミュニケーション」へのつながり（系統性）があること。つまり，「他者とのやりとり」が将来的な目標である。
- * 構音の実態が「機能的なものか」，「認知的なものか」の見極めが重要。そして，目標（ターゲット音）へ生かす。

